

<研究ノート>

滋賀県中畑遺跡出土平安時代犁の検討

河野 通明

はじめに

このところ私は「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」(2004)⁽¹⁾、「滋賀県川田川原田遺跡出土犁の伝来事情とその後」(2004)⁽²⁾、「7世紀出土一木犁へら長床犁についての総合的考察」(2004)⁽³⁾と、古代の出土犁に関わる論考を発表してきた。そのなかで取り上げたのは7～8世紀の出土犁9点で、10～11世紀の中畑遺跡出土犁についてはひとまず考察の外におき、後日の課題としてきた。それは1981年来続けてきた各地の資料館収集の犁調査の結果、日本各地の在来犁の形は基本的には6～7世紀に決まってしまうらしいことが見えてきたため、その時期にかかる7～8世紀出土犁の検討をまず優先したからである。

ところで在来犁の形は基本的には6～7世紀に決まってしまうとするなら、中畑遺跡出土犁も6～7世紀以来たびたび更新を繰り返しながらも300年間ほとんど形を変えずに10～11世紀に至った可能性が高い。となれば10～11世紀に出土した中畑遺跡出土犁は7～8世紀犁とほとんど同等の意味をもつことになり、その考察もまた避けて通れない課題として浮上してきた。そんな折り中畑遺跡出土犁の報告書『中畑遺跡Ⅱ』⁽⁴⁾が刊行された。これをいい機会ととらえて、考察に踏み切ることにした。

1. 出土状況と遺物の概況

報告書によれば、出土状況と遺物の概況は次の通りである⁽⁵⁾。

遺跡の概況 中畑遺跡は〔図1〕に示したように、琵琶湖の南端の東岸に位置する。竜王山に発し西北西にながれて琵琶湖に注ぐ草津川は、国道1号線やJR線が河床の下をトンネルでくぐるという、地理分野ではよく知られた天井川であった。そのため周辺は伏流水で排水不良な湿地となり、また堤防決壊による洪水被害をもたらし、これを防ぐため新川を掘削し、天井川部分を平地化する計画が推進されたが、その新川ルートにかかる遺跡の1つが中畑遺跡である。中畑遺跡の標高は94～96m、地図からは湖岸の標高は86mと読めるので、比高は8～10mとなる。もっとも琵琶湖の水位は時代により変化しているので、これはあくまで目安である。遺跡の西部に弥生～平安時代遺構、東部には中・近世遺構があり現集落につながる。

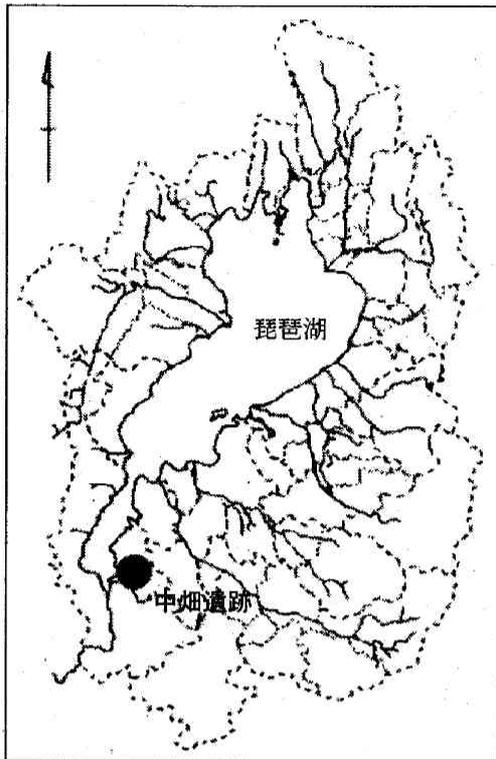


図1 中畑遺跡の位置

(「中畑遺跡 II」より)

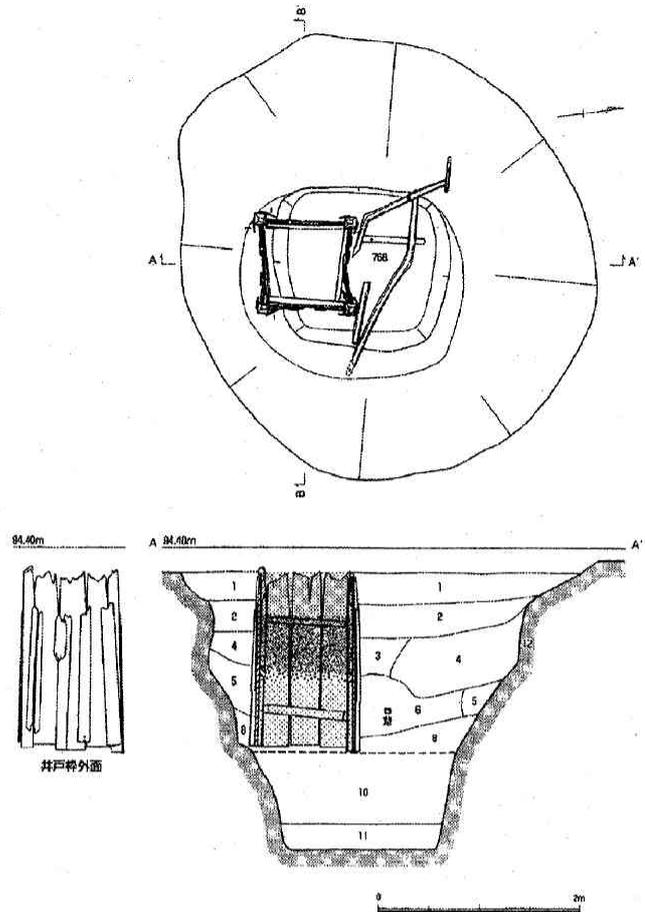


図2 犁の出土状況

出土状況 犁は1990年に、〔図2〕のように縦板組方形井戸の掘方から発見された。井戸は10世紀中頃に作られたあと、10世紀末～11世紀初頭に作り替えられており、井戸枠は掘方の南側に寄せて設置し、その北側に横たえた形で木部完形品の犁は出土した。この井戸は掘方が井戸枠に比べて異様に大きいこと、井戸枠が掘方の中心ではなく南側に寄せた形で設置され犁のためのスペースを広くあけていることから、犁は意図的に埋納されたと考えられる。また犁轆の先端のみ若干離れた位置から出土したので埋納時に折損していたと考えられ、意図的に折られた可能性が高いとされている。井戸の改築時期は出土土器から10世紀末～11世紀初頭とされている。

遺物の概況 〔図3〕の犁本体については、報告書は詳細かつ的確な観察結果を載せており、ここでは要約して紹介することにしたい。

本体は全長232.9cm、高さ77.0cm。犁床は犁柄と一木造りで、犁床長43.5cm、犁床幅は基部で5.2cm、先端でも6.7cmと狭く、底部は操者から見て右上がりに削られ、底面は使用による摩滅が著しい。

犁柄は後傾し、上端には長さ34.5cm、径3.4cmの把手が前後方向につく。犁轆後端を差し込む柄穴は前面が幾分縦長に穿たれ、下部の右側面に方向転換用の全長16.4cmの小把手がつく。

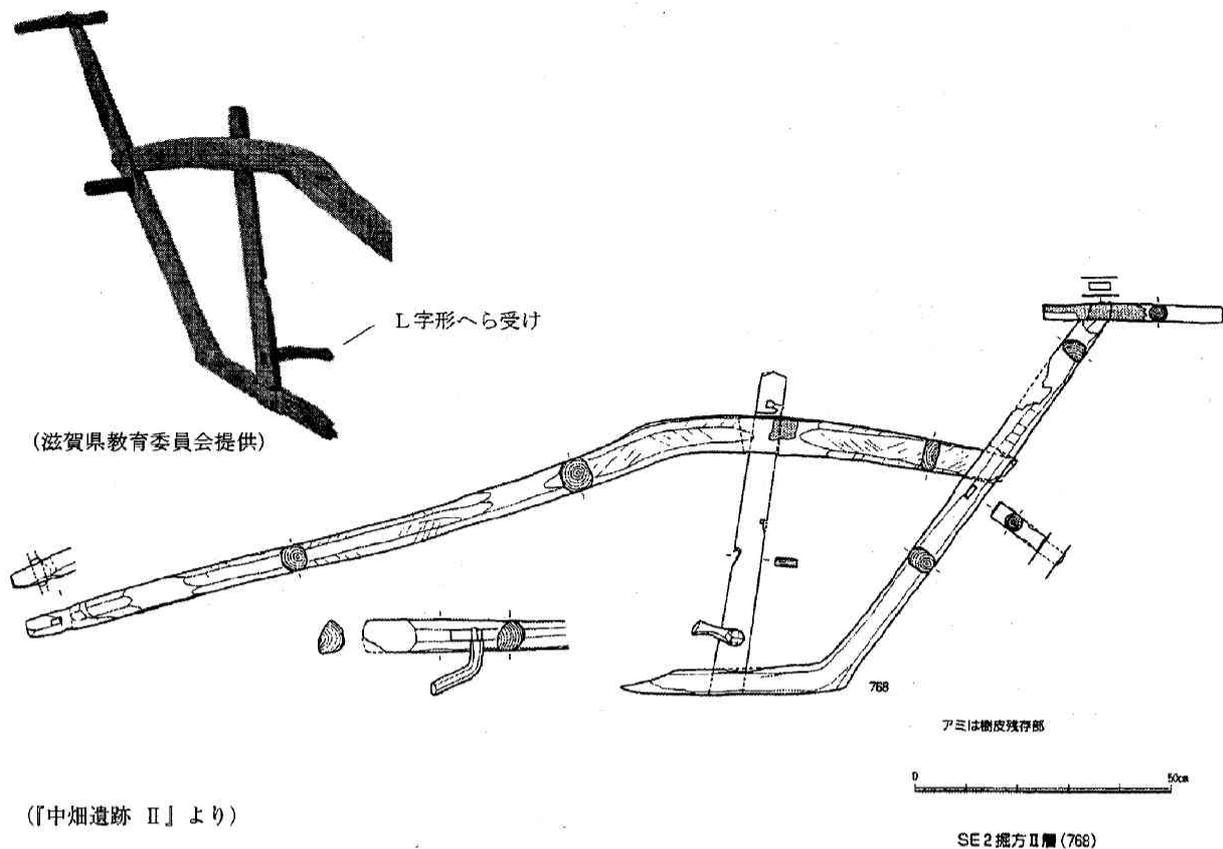


図3 中畑遺跡出土犁

犁柱は長さ 63.3 cm，幅は上端で 5.3 cm，下端で 6.4 cm，厚さ 1.8 cm で，前面の中程よりやや下に犁へら上端を受ける抉りがある。この抉りの上方後面寄りに 0.8 cm の方形小孔があり，犁へらを固定するための紐穴と解されている。犁柱の下方の左手にへら受けと考えられる L 字形枝材が装着されており，この L 字材の先端面およびさきに見た犁柱のへら受け抉りの面は，左側がやや後退する形に削られていることから，左反転の犁へらが装着されていたと解されている。

犁轆は曲轆で非常に長く，全体に面取りがなされているが，犁柱を挿入する柄穴付近は強度を保つため面取りはなされず樹皮が残る。先端には縄掛けの細棒が差し込まれており，この部分に縄擦れ痕が残る。

材は犁床・犁柄・犁轆はヒサカキ，犁柱・把手・小把手はアカガシ属，L 字形へら受けはサクラ属である。

2. 在来犁における無床犁・長床犁および混血型の成立条件

中畑遺跡出土犁の分析に先立って，近年わたしが進めている在来犁の形態から系譜を読み分け，さらに時代を特定する方法について，略述しておきたい。

a 朝鮮系無床犁と中国系長床犁との形態上の差異

日本の犁は朝鮮半島や中国から伝わったものと考えられるが，明治以来，日本の犁は鋤や鋤の

ような簡単な人力耕起具から複雑な畜力犁へと日本国内で発達してきたという犁耕国内発生説が繰り返し説かれており、その影響は戦後にまで及んでいる。これらの説については、河野「日本における犁耕国内発生説の再検討」(1994)⁽⁶⁾において、初源的な犁と考えられ国内発生説の根拠とされてきた図像資料を逐一検討して、犁耕の資料として不適格であり、国内発生説は成り立たないことを論証した。1970年代後半の飯沼二郎(1976)⁽⁷⁾、嵐嘉一(1977)⁽⁸⁾以降は、伝來說が主流となっている。

中国犁は四角枠の長床犁で右反転、朝鮮半島犁は三角枠の無床犁で左反転であることは、学界の共通認識といていいが、これは1頭引き犁の話であり、2頭引き犁と1頭引き犁の区別については、学界ではあまり関心が寄せられなかった。ところで世界的にみても犁はまず2頭引き犁として成立し、そこから1頭引き犁が派生すると考えられる。東アジアにおいても2頭引き犁が先行し、そこから1頭引き犁が生まれ、それが日本に伝来した。先にのべた中国犁と朝鮮半島犁の形態差もこの過程で生まれたと考えられるが、この点についても関心は向けられなかった。そこでわたしは「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」(1996)⁽⁹⁾において、東アジア北部の2頭引き犁が中国大陸と朝鮮半島において、それぞれ独自に南下し1頭引き犁化する過程で、犁型のみならず首木や尻枷など牽引具を含む形態差が生まれたことを論証した。この成果をふまえてあらためて1頭引き犁の中国犁と朝鮮半島犁の形態的特徴、およびそれとセットになる牽引具の形態的特徴を示すと次のようになろう。

中国の1頭引き犁は犁轅・犁柱・犁柄・犁床の4部材からなる四角枠の骨格をもち、犁轅は犁柱の前方で下方に折れ曲がって曲轅となる。犁へらは右反転で右捻れの曲面へらという形態をとる。首木はかつて引綱の稜線渡しをとともなう引綱渡し首木が主流を占めていたと考えられ、それらを左右の引綱を介して尻枷につないで牛の入るスペースを確保し、尻枷の midpoint と犁轅先端を縄でつないで完成する。当初は木と縄の構成であったと考えられるが、現在の中国の民具では結合部には鉄金具が多く用いられている。犁先・犁へらとも鑄鉄製である。

朝鮮半島の1頭引き犁は犁は犁轅・犁柱・犁身の3部材からなる三角枠の骨格をもち、犁轅は多くは直棒で、前方に向かって下降する下降直轅となる。犁へらは左反転で、平面かかすかな凹面をなすものが多い。他方犁へらを欠くタイプも多く見られる。首木は首かせ棒で牛の頸を左右からはさむ首かせ付き首木があるが、首かせ棒をもたないくの字形首木も見られ多様である。朝鮮半島では尻枷の発明には至らなかったため左右の引綱を犁轅先端に結ぶ結果となり、引綱が牛の後肢を擦って傷つけるのを防ぐため犁轅の前方に40~50cmほどの「幅木」(=半尻枷)を噛ませるほか、引綱は長くなる傾向がある。犁先・犁へらとも鑄鉄製で、中国犁に比べて大振りなものが多い。

なお日本の無床犁には犁体の長大なものから短いものまで多様なバラエティーがあり、わたしはそれらを犁体の長短によって便宜上「長体無床犁」「短体無床犁」「中体無床犁」などと呼び分けることにしている。

b 在来犁の形態比較にもとづく6~7世紀地域史復原の「公式」

わたしはこれまで、日本の犁耕の伝来には①6世紀に朝鮮系渡来人によって牛と無床犁が持ち込まれた。②大化改新政府は遣唐使を通して唐の長床犁を入手し、それに改良を加えて一木犁へら・左反転の政府モデル犁をつくり、その実物模型=様を多数複製して各地の評督のもとに流して普及を図った。この政策の施行時期は654年7月~665年2月の10年7ヶ月間のどこかである。③663年の百済滅亡、668年の高句麗滅亡にともなう難民も朝鮮系無床犁を持ち込んだと考えられる、という日本古代には犁耕伝来に3つの波のあることを論証した⁽¹⁰⁾。

そうだとすれば6世紀渡来人の居住していた地域では使い慣れた朝鮮系無床犁の上に7世紀中葉の政府モデル長床犁の波を被って混血がおこり、朝鮮系渡来人の来ていなかった地域では政府モデル長床犁が素直に受容され、7世紀後半の百済・高句麗難民の居留地域では、一過性の政策施行後に渡来したため混血は起こらず、朝鮮系無床犁がそのままの形で使われることになる。この原理を逆に使えば、

混血型のある地域 → 6世紀渡来人の居留地とその周辺

政府モデル犁の後裔の使われている地域 → 6世紀に渡来人が来なかった地域

非混血の朝鮮系無床犁が使われている地域 → 百済・高句麗難民の居留地域

となり、在来犁の分布を調べることによって、その地域の6~7世紀の民族分布図が復原できることになる。これは主として関西地方の在来犁調査から抽出したある種の「公式」であるが、関東や四国に適用してみた結果ではおおむね妥当な結論が得られており、民具の在来犁から地域の古代を復原するためのかなり有効な方法と考えている。

この観点から観察すれば、中畑遺跡出土犁は混血型に相当する。それでは〔図4〕にもとづいて、中畑遺跡出土犁のなかから朝鮮系要素と政府モデル系要素を分別抽出することにしよう。

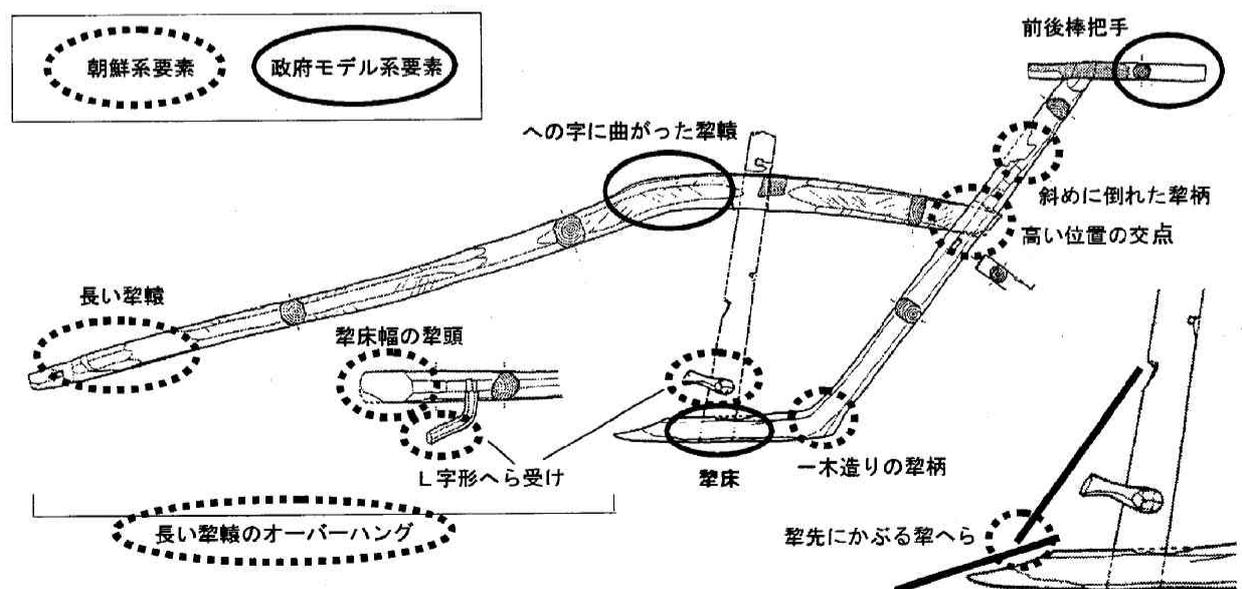


図4 中畑犁の朝鮮系要素と政府モデル系要素

3. 中畑遺跡出土犁の朝鮮系要素と政府モデル系要素

a 朝鮮系無床犁の要素

① 犁床と犁柄が一木造りであること

中国系長床犁では犁床と犁柄は別材であり、政府モデル犁もその形式を踏襲していたと考えられるが、それに対して朝鮮系無床犁では犁先を銜える部分と犁柄とは一体の犁身であり、直棒であることも多い。中畑遺跡出土犁は幹と枝を利用した一木造りであり、明確な犁床は政府モデル犁からの継承と考えられるが、犁床と犁柄をあえて一木造りにするのは、無床犁がすでに使われていたことの痕跡と見られる。一木犁身を使い慣れ、かつ更新製作の経験があった者にとっては、犁床・犁柄が別材・柄組みの長床犁に出会った場合にも、この部分は一木で成形しようという発想が生まれるのであろう。多くの民具例はこの解釈で理解できることからして、中畑遺跡出土犁の場合もこの推定が妥当と考えられる。

② 犁柄の傾きが大きいこと

犁柄は地面に対して 52.6° の傾きで傾斜している。これは梶原遺跡出土犁Aが 86° 、同Bが 71° 、下川津遺跡出土犁Aで 78° で平均 78.3° であるのに対して、かなり傾きが大きい。これは朝鮮系無床犁のうち犁体の長い長体無床犁では犁柄をふくむ犁身の傾きは 40° 以下、全長3mを超級になると傾きは 20° 以下になるという朝鮮系無床犁の形質を継承したものと考えれば辻褄が合う。

③ 犁床が短いこと

7世紀出土の長床犁の木部の犁床の長さを政府モデル犁を継承したと考えられる4例の犁床長をみれば、梶原遺跡出土犁Aの66.5cmから下川津遺跡出土犁Aの78.0cmの範囲で平均は71.9cmである。これに対して中畑遺跡出土犁は犁床長43.5cm、平均値の6割程度ではるかに短い。これは本来無床で大きく傾いた犁身を見慣れ使い慣れた人々が長床犁を導入し、しかも犁柄と一木造りにしたために、犁床が短くなってしまったということと理解できよう。

④ 犁轆・犁柄の交点の位置が高いこと

中国系の長床犁では犁轆は大きく曲がった曲轆であり、犁轆・犁柄の交点の位置が低い。梶原遺跡出土犁は典型的な曲轆長床犁で、犁轆上面と犁柄前面との交点の地上高を計ると、犁柄柄穴に遊びがあるので、梶原A犁では34.8~37.8cm、梶原B犁では25.6~27.0cmである。これに対して中畑遺跡出土犁では47cmではるかに高くなっている。これは朝鮮系無床犁では一般に犁轆は直棒で犁轆・犁柄の交点は高く、そこから前方にむかって下降する下降直轆という形態をとるのが一般的であり、中畑遺跡出土犁でも直棒犁轆の形質が残って曲轆にしながらも曲がりは弱く、犁轆・犁柄の交点も高い位置にとどまったものと解釈できる。

⑤ 犁轆が長くオーバーハング値が大きい

中畑遺跡出土犁は犁轆の長さは先端から犁轆・犁柄の交点までの弦長で190cmと長く、これを政府モデル系の梶原遺跡出土犁と比較すれば、梶原A犁112.8cm、梶原B犁では120.8cmで、70

cmほど長いことになる。また犁轆先端が犁床先端よりどれだけ前方に位置するかという数値、これを「犁轆のオーバーハング値」と呼ぶことにするが、これも116 cmと大きい。もっとも中畑遺跡出土犁は犁先を欠いているので、鉄製犁先を装着したときの犁先先端位置を6 cm前方と仮定すれば、補正後のオーバーハング値は110 cmとなる。これを梶原遺跡出土犁と比較すれば、梶原遺跡犁も犁先を欠くので、補正を加えた犁轆のオーバーハング値は梶原A犁で45.2 cm、梶原B犁で49.2 cmで60 cm余りの差があることになり、中畑遺跡出土犁の数値が異常に大きいことが理解されよう。犁轆のオーバーハング値の大きいのは朝鮮系無床犁にも見られるものであり、朝鮮系要素と考えられる。この点については後に詳しく検討することにしたい。

⑥ 犁床と同じ幅の木部犁頭

日本の長床犁では犁先を受ける木部犁頭はしゃもじ形に幅を広げて成形するのが一般的で、政府モデル犁の形質を継承したものと考えられる。ところが中畑遺跡出土犁は基部で5.2 cm、先端で6.7 cmで先に行くほど広がるもののしゃもじ形に段差をつけて広げることはなく、6.7 cmという数値にしても一般の犁では犁床幅そのものである。この犁床幅そのままの犁頭は朝鮮系無床犁にときおり見られる特徴であり、この場合は犁先を被せた場合に、犁先裏面の受け袋との間に隙間ができて固定できなくなるが、その場合には左右の隙間に後方から楔を打ち込んで固定する。これは当初から犁先の形状を予測してぴったりサイズに木部を加工するのではなく、適当にしておいて装着してから対応するという韓国の民具によく見られるやり方である。

⑦ 犁先に被さる犁へら

中畑遺跡出土犁は犁先も犁へらも欠くが、犁頭上面の形状から犁先の位置や角度は推定でき、犁柱前面の切りこみと側面に装着したL字形へら受けから犁へらの位置が推定できる。そこでそれらの位置を犁の中心軸上の断面で示したのが〔図4〕の右図である。犁へらは左反転の平面へらと考えられるので、中心軸上ではL字形へら受けとは接しないのですし前面に配置した。この図からすれば犁へらの下端は犁先の上面に被さってしまう。犁へらの下端は犁先の上面に被さるのは朝鮮半島の犁へら付き犁によく見られる特徴である。この特徴は中国の雲南省の在来犁にも見られるが、この地の犁と古代日本の犁とは直接の関係は考え難いので、比較の対象からは外すのが正しい処理であろう。そして日本に関係の深い長江下流域と朝鮮半島南部の範囲でいえば、犁へらの下端が犁先に被さるのは、朝鮮系の系譜を示すものと考えるのが妥当なようである。犁へらの被さりは大坂平野や奈良盆地の長床犁にも見られるが、左反転・平面へらともども朝鮮系無床犁からの継承とわたしは考えている。

⑧ L字形へら受け

中畑遺跡出土犁には犁柱左側面に小枝を利用したL字形へら受けが取り付けられており、左反転犁であることを示すとともに他の出土犁には見られない特徴となっている。これと同形のL字形へら受けが韓国済州島の在来犁に見られることから、このルーツは朝鮮系無床犁にあるとほぼ断定できよう。

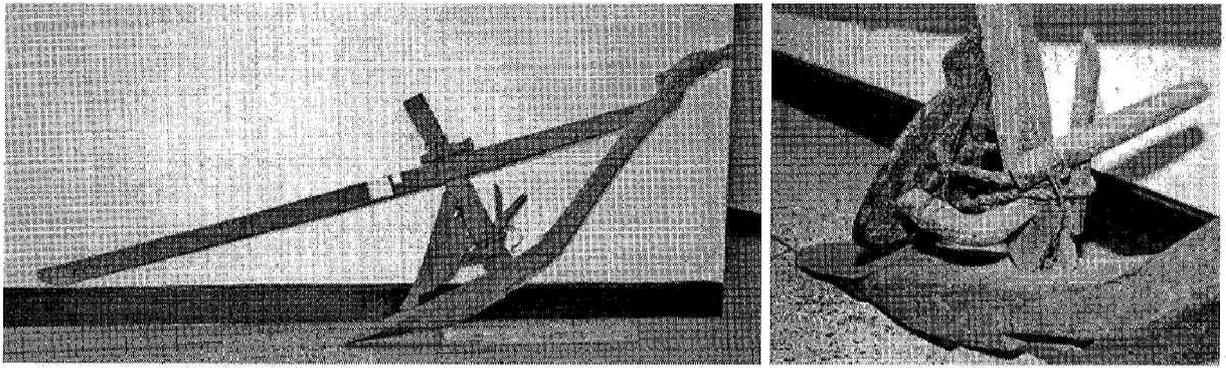


図5 韓国済州島犁のL字形へら受け (済州大学校)

〔図5〕はそのL字形へら受けで、済州大学校博物館に収集されているものである。この例では鑄鉄製の平面へらの裏面に4つの鈕が鑄出されており、そこに細縄を通して犁柱に括りつけ、隙間に棒を差し込んで締めている。さらに緩めば振って締めた上で棒を固定するのであろう。中畑遺跡出土犁のL字形へら受けはこの済州島犁と同系統であり、犁へらの鈕に細縄を通して犁柱に括りつけていたものと考えられる。中畑犁の犁柱上方の小孔も、この推定とよく符号する。ただしわたしの韓国調査は始まったばかりでL字形へら受けが済州島にあることは確認したものの他の地方はほとんど未調査である。したがってL字形へら受けは朝鮮系であるとは言えても済州島がルーツと断定できるわけではない。

〔図6〕は東近江市旧湖東町の在来犁で、1例だけへら受け突起を持っている。これは前方・側方2つのへら受け突起を埋め込んだものでL字形へら受けではないが、参考までに掲げた。

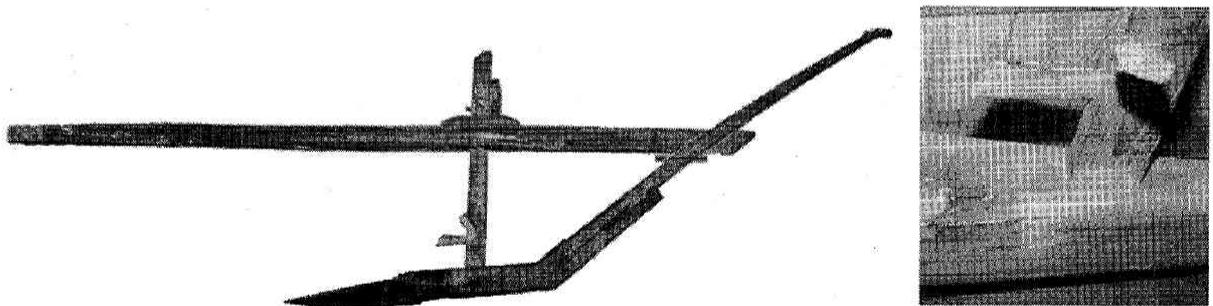


図6 湖東町犁のへら受けと一木造りの犁床・犁柄 (東近江市湖東歴史民俗資料館)

b 政府モデル長床犁の要素

① 犁床をもつ有床犁であること

犁床をもつ長床犁は中国系1頭引き犁の特徴である。日本の場合はすでに述べたように中国系長床犁が民間レベルで持ち込まれた形跡はなく、大化改新政府を通して導入されたと考えられ、かつ改新政府の手で日本向けに改良・改変された上で行政ルートを通して上から、ある強制力をもって普及が図られたと推定される。したがって中国系長床犁の要素は政府モデル犁を媒介とし

て地域社会に入ったことになるが、中畑遺跡出土犁では43.5 cmとやや短いものの、明確な犁床をもつのは政府モデル犁からの継承であろう。

② への字に曲がった犁轆

中国系長床犁は2頭引き犁時代の直轆の牽引点を下げるために曲轆となったもので、犁柱との交点より前方でへの字に曲がるのが原型と考えられ、中国の在来犁にもよく見られる。梶原遺跡出土犁の犁轆もA犁、B犁ともへの字に曲がっており、政府モデル犁が中国系長床犁を継承してへの字に曲がっていた形態を継承していたものと考えられる。中畑遺跡出土犁もまた犁柱との交点より前方でへの字に曲がっており、政府モデル犁を通して中国系長床犁の形質を継承したものであろう。

③ 水平にのびる前後棒把手

中畑遺跡出土犁の把手は犁柄上端に柄組みされた前後方向に伸びる水平棒把手である。一般的に朝鮮系無床犁は犁身の上端を自然に細めて握る直棒把手であることからすれば、前後方向に伸びる水平棒把手は朝鮮系ではない。他方、梶原遺跡A犁の把手は枝分かれ材を利用して握り部分は前後方向に伸びる水平棒把手となっており、これは政府モデル犁から継承したものと考えられる。この2つの条件からして、中畑遺跡出土犁の前後方向に伸びる水平棒把手は政府モデル犁から継承したと考えられる。

4. 1頭引き犁と犁轆のオーバーハング値

先に中畑遺跡出土犁は犁轆の弦長が長くオーバーハング値が大きいことを指摘したが、この犁轆が長くオーバーハング値が大きいという形質は、2頭引き犁に起源をもつ。西アジアに生まれ、シルクロードを経て中国北部・朝鮮半島北部に及んだと考えられる2頭引き犁は、2頭の牛の頸に横棒の首木を掛け、犁本体から斜め上方に長い直棒犁轆を伸ばして首木に掛ける。そのため犁轆は2頭の牛の間を通過して首木にいたるために長くなり、同時に犁先先端からのオーバーハング値も大きくなる。国立民族学博物館収集のトルコとインドネシアの2頭引き犁5例では195 cm～285 cmで、突出した285 cmを除外した4例平均は206 cmでとなり、2 mを超すオーバーハング値を持っている⁽¹¹⁾。

この2頭引き犁が中国と朝鮮半島で1頭引き犁化し、その結果の1頭引き犁がそれぞれ日本に持ち込まれたわけだが、犁轆の長さやオーバーハング値の大きさは1頭引き化の過程で基本的に決まると考えられる。2頭引き犁を1頭引き犁に改良しようとした場合、中国の場合は曲轆の発明により牽引点が下がったため、短い犁轆での安定走行が可能となり、オーバーハング値は大きくならない。これに対して朝鮮系無床犁の場合は直轆に固執したため、犁轆を切りつめることによる犁体の前傾を嫌った場合は2頭引き犁時代の長い犁轆を継承してオーバーハング値が大きくなる。この犁体の前傾を嫌うか気にせず受容するかは使用者側の選択によるものなので、地域によりオーバーハング値の大きなものも小さなものもあり得たことになる。

話を中畑遺跡出土犁にもどせば、中畑遺跡出土犁のオーバーハング値が大きいのは、たまたま中畑地区では6世紀にはオーバーハング値の大きな無床犁が使われており、そこに政府モデル長床犁が下ろされてきたために、オーバーハング値の大きな混血型犁が出来上がったと考えられる。中畑遺跡出土犁のオーバーハング値の大きさはこうした偶然的契機によって成り立ったと考えられ、これを土質や地形から説明しようと試みるなら、それはたぶん正鵠を得ていない。

オーバーハング値の大きなことによる使用時のメリットとデメリットを挙げるなら、犁轅が長くなる結果、牽引点が首木—刃先線に近づくので使用時に犁体の前のめりがおこりにくくなり、走行安定性が向上することになる。ただし犁轅が長くなることによって重心が前方に移動し、それは走行安定性にはマイナス方向に働くので、メリットは若干相殺されよう。デメリットとしては牛と刃先の距離が大きくなり、牛が畦の先端まで行って折り返す際の鋤き残し部分が大きくなることと、牛と操者の距離が大きくなってコントロールがしにくくなることである。とくに鋤き残し幅はオーバーハング値を直に反映するので、このデメリットは大きい。ところで中畑遺跡出土犁の場合はオーバーハング値が異常に大きいために牽引点が首木—刃先線より下になっていると考えられ、そうであるなら走行中の刃先には上向きの力がはたらき、浅耕志向となって深く耕すことができにくくなるであろう。

この点をいま少し詳しく見ていくと、報告書に掲げられた1/10実測図を資料として図上で刃先からみた牽引点の仰角を算出すれば、まず実測図では犁柱の上端の栓穴と犁轅上面には1.5 cmほどの隙間があるので使用時には犁轅がいっぱいまで上がって栓の下面と接すると想定する。次ぎに報告書では犁柄に穿たれた犁轅を受ける柄穴は「前面が幾分縦長に穿たれており犁轅の取り付け角度の調節が可能である」としているが、後面にほとんど遊びがないので犁轅後端の位置はほぼ固定されてしまっている。この状態で使用時には犁先がはめられるので、その木部犁頭上面の延長線が地面と接する点を根拠に犁先の厚みを考慮して刃先の位置を木部犁頭先端から6 cm前方にあると仮定する。さてこの刃先位置から修正後の犁轅先端の牽引点を見上げた仰角は 11.4° となる。これは牛に首木のみで引かせる首引き法の場合の刃先からみた牽引点の仰角が 20° 程度、首木に鞍を併用した首引き胴引き法の場合は $23\sim 25^\circ$ 程度であるのに比べて異常に小さい値である。もっとも適正值の 20° はオーバーハング値が大きくなったため若干小さくなるのが考えられるが、その点を考慮してもなお小さい値である。この状態で耕起走行するなら、牽引点は首木—刃先線に近づこうとするため走行中の刃先には上向きの力がはたらき、浅耕志向となって深く耕すことができにくくなると考えられる。

そこで犁轅をどの程度切りつめれば使いやすくなるか試算してみよう。犁轅位置を犁柱交点で1.5 cm上げた状態で犁轅を何cm切りつめれば刃先からみた牽引点の仰角が 20° あるいは 25° になるかを図上から試算すると、110 cmあるオーバーハング値を81 cmにすれば仰角は 20° となり、69 cmにすれば仰角は 25° となる。つまりオーバーハング値を35 cm前後短くすれば走行中の犁先の浮き上がりを防げることになる。そしてオーバーハング値が35 cm前後短くなることは、

その分だけ鋤き残し幅が減ることになり、使用者にとっては使いやすさは倍増することになる。これを裏返せば中畑遺跡の人々は何のメリットもなくオーバーハング値 110 cm という異様に長い犁轅の犁を使っていたことになる。もっともここでは中畑遺跡の土質は考慮していない。仮に粘りの強い粘土質であったなら走行時の負担を軽くするために牽引点を下げることは考えられるが、他方でこの場合は犁体にかかるストレスは大きくなるので、一般水準より頑丈に造らなければならない。ところが中畑遺跡出土犁は民具の犁よりも華奢であり、しかも犁床底面の摩耗から実用犁であることは疑いない。となれば強粘土質であった可能性は低いことになる。

一般に農具の研究では、在来農具の形は長い年月を経てその土地の土質や地形にもっとも適応した結果であると考えられているが、中畑遺跡出土犁は決してそうではないことを証明する一つの例といえよう。では中畑遺跡の人々はなぜ何のメリットもない異様に長い犁轅の犁を使っていたのか。これはただ昔から使ってきたものだからそのまま使っていたと説明するより他はない。

まず伝統的農村社会では男の子は少年になると親から牛と犁を使い方を習い、10才を超えるころとなれば牛を使えないと一人前ではないといわれた。使いにくい農具を使いこなしてこそ一人前とされる環境のなかでは技倆の向上こそが課題であり、農具を改良しようという方向には思考は働かなかつたと考えられる。また鋤のような手の延長であり、所有形態も個人に属する農具については個人々々が改良を加える余地もあろうが、犁は家に付属する農具であり、牛とセットであることからして、個人が犁の改良を考える余地は少なかったと考えられる。

おわりに

以上、中畑遺跡出土犁の主として系譜的側面について考察を試みた。その結果、次のような中畑遺跡地域の歴史が復原できよう。

つまり近江の中畑遺跡地区近辺には6世紀に朝鮮系渡来人が無床犁を持ち込んだが、それはたまたまオーバーハング値の大きいタイプであった。というかオーバーハング値の大きいタイプの無床犁が使われていた地域から人々が渡来してきたということになる。そしてそれが渡来後も使われ周辺の日本人集落にも浸透し始めていた時期に、大化改新政府が政府モデル長床犁を下ろして評督を通じて使えと命じてきた。評督は改新政府下での地位保全がかかっていたので、一般的にその普及には積極的であったと考えられるが、そうした圧力のなかですでに朝鮮系無床犁が使われていた地域では混血がおこる。そして一旦その型が固まってしまうと、すでに考察したように伝統的農村社会では犁は改良の対象とはならず、多少の使いにくさを含みながらもそのまま継承されていくことが多い。その点からすれば10世紀末～11世紀初頭に出土した中畑遺跡出土犁も、混血の起こつたと考えられる7世紀後半以来、犁の耐用年数を20年とみるなら15～17回ほどの更新を繰り返しながらも300～350年間ほとんど形を変えずに10～11世紀に至った可能性が高い。となれば10世紀末～11世紀初頭に出土した中畑遺跡出土犁も、7～8世紀犁とほとんど同等の価値をもつことになることは、冒頭に指摘した通りである。

これまでの在来犁調査の結果からすれば、近江の湖東南部地域の在来犁にはオーバーハング値の大きい例が多く見られる。ただ形態は長床犁あり無床犁ありと多様であり、中畑遺跡出土犁の直接の後裔と見られる個体にはまだ出会っていない。この点はまだ調査中なので、いずれ調査の進行した時点で報告することにしたと考えている。

[付記] 本稿をなすにあたっては滋賀県文化財保護協会の平井美典氏および協会・教育委員会の方々、東近江市教育委員会の森谷子氏、済州大学校の高光敏氏にお世話になった。記して感謝の意を表したい。

注

- (1) 河野通明「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」(『ヒストリア』第188号, 2004年)。
- (2) 河野通明「滋賀県川田川原田遺跡出土犁の伝来事情とその後」(『商経論叢』第39巻第4号, 2004年)。
- (3) 河野通明「7世紀出土一木犁へら長床犁についての総合的考察」(『商経論叢』第40巻第2号, 2004年)。
- (4) 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会『中畑遺跡Ⅱ 草津市矢倉一丁目』(2005年)。
- (5) 注(4)『中畑遺跡Ⅱ』, 1, 122, 127頁。
- (6) 河野通明「日本における犁耕国内発生説の再検討」(『佛教大学総合研究所紀要』創刊号, 1994年)。
- (7) 飯沼二郎・堀尾尚志『ものと人間の文化史・農具』(法政大学出版会, 1976年)。
- (8) 嵐嘉一『犁耕の発達史—近代農法の端緒—』(農山漁村文化協会, 1977年)。
- (9) 河野通明「東アジアにおける犁耕の展開についての試論」(『商経論叢』第32巻第1号, 1996年)。
- (10) 河野注(1)(2)論文。
- (11) 国立民族学博物館トルコの2頭引き犁(N10006, N10007), インドネシアの2頭引き犁(T01013, T01015, T01016)